



社会に貢献する群馬大学

群馬大学の活動の一部をご紹介します。
我々は、これからも地域とともに歩んでいきます。

1. 教育

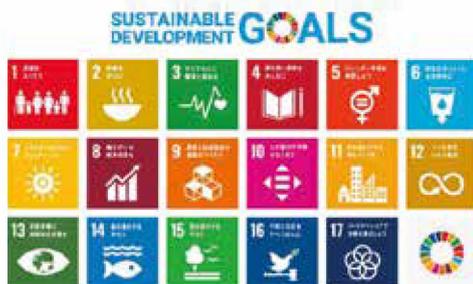
- ① 150年の歴史と伝統の教員養成・・・・・・・・・・・・・・・・ p 1
- ② 新たな時代を切り拓く情報人材の養成・・・・・・・・ p 2
- ③ 地域医療に携わる医師の育成・・・・・・・・ p 3
- ④ 教育を軸とした医療安全文化の醸成・・・・・・・・ p 4
- ⑤ 保健師人材育成への取り組み・・・・・・・・ p 5
- ⑥ 多職種連携教育で保健医療人材育成に貢献する p 6
- ⑦ 社会人の活躍の場を広げるリカレント教育 p 7
- ⑧ 群馬と世界をつなぐグローバル人材の養成と就職支援 p 8
- ⑨ 国際社会で活躍できるリーダーの養成 p 9
- ⑩ 先進的な教育を実践する附属学校園 p 10

2. 研究

- ① 海を汚さないプラスチックの開発 p 11
- ② 心臓移植を待つ子どものための体内埋込型人工心臓の開発 p 12
- ③ 糖尿病の根絶を目指す新たな治療法の開発 p 13
- ④ 自動運転、スローモビリティで社会の課題を解決 p 14
- ⑤ 重粒子線による最先端がん治療の研究開発 p 15
- ⑥ ウイルスベクターで脳の難病治療法開発に挑む p 16

3. 地域貢献

- ① 地域医療の拠点、「群馬大学医学部附属病院」 p 17
- ② オーダーメイドの治療を可能とするがんゲノム医療 p 18
- ③ 群馬ちびっ子大学 p 19
- ④ ダイバーシティ&インクルージョンの推進 p 20
- ⑤ ウクライナの学生・研究者の受け入れ p 21
- ⑥ 世界をひきつけ、地域をグローバルに展開する拠点を目指して p 22
- ⑦ 群馬大学が古墳大国群馬県を発掘 p 23



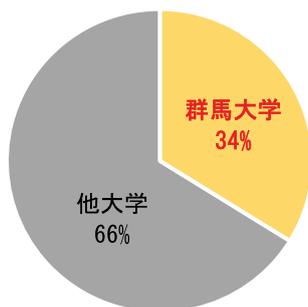
群馬大学は、国連で採択された
「SDGs（持続可能な開発目標）」
にも積極的に取り組んでいます。



150年の歴史と伝統の教員養成

(共同教育学部)

群馬大学の教員養成の歴史は、明治6年(1873年)に設置された小学校教員伝習所から始まります。令和5年(2023年)度は、その誕生から150年を迎えます。歴史と伝統に裏付けされた充実した教育内容を誇る群馬大学共同教育学部。1世紀以上、群馬県の教育を支え続けています。



群馬県公立学校教員採用試験の
合格者占有率(令和4年度採用)

群馬大学は大学が設置された昭和24年(1949年)から2万人を超える卒業生を送り出しています。その多くは群馬県の公立学校で教員として働いています。令和4年度の群馬県公立学校教員採用試験では34%が群馬大学の学生です。

また、教育学部は、令和2年度(2020年)宇都宮大学と教育資源の相互活用をはじめとする連携協力により、それぞれの魅力をフルに発揮する共同教育学部へと生まれ変わりました。ますます高まる教員の資質能力向上への要請に応えていきます。



ネイティブ教員による英語授業



ICTを活用した授業



手話の授業



教育実習の様子



藤森 健太郎 共同教育学部長

「地域に根ざした大学として、子どもたちに寄り添って成長を支えることができる教員を学校に送り出し、地域社会を支える役割を果たしていきます。」

新たな時代を切り拓く情報人材の養成

(情報学部)



令和3年(2021年)4月、社会情報学部と理工学部電子情報理工学科情報科学コースを統合し、データサイエンス分野の教育も取り入れた「情報学部」を設置しました。

情報学部は、情報を基軸とした文理横断型の教育により、Society 5.0を支え、IoT、ビッグデータ、統計的解析手法等のスキルを持ち、人文科学、社会科学、自然科学の知識を有した人材を育成します。

新たな時代にふさわしい実践力を持った情報人材を育成する4つのプログラム



1年次 学部基盤教育

2年次 プログラム選択

3年次 ゼミ、PBL

4年次 卒業研究



外観

情報系研究棟(10号館)

令和5年(2023年)完成。

全学のデータサイエンス教育の中核となる施設で、情報教育がさらに充実します。

群馬大学は、令和2年(2020年)度から全ての学生を対象に「データ・サイエンス」を必修化しています。これらの取組により、文部科学省から「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」に認定されました。



高山 利弘 情報学部長

「情報学部は、1993年設置の社会情報学部、さらには1973年設置の工学部情報工学科に遡ります。奇しくも2023年はそれぞれ30年、50年の節目です。情報学部は3年目。これから新たな歴史をつくります。」

3

すべての人に
健康と福祉を

地域医療に携わる医師の育成

(大学院医学系研究科)

「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」事業が始まります

ポストコロナ時代に地域の医療現場で活躍する医療人を育成するため、群馬大学では埼玉医科大学と連携し、利根川プログラムをはじめとした新たな教育プログラムを開発し、地域で必要な知識・技能・態度・価値観を共有する医学生の育成に取り組みます。



地域への愛着と地域医療を担う資質・能力・マインドを持つ医師を養成します

人口10万人当たりの医師数が全国平均を下回る群馬県では、人口減少や急速な高齢化が進む中、医師の確保は重要な課題です。地域に密着し、総合診療・プライマリケアから高度・先端医療まで、これから必要となる臨床能力を身につけた医師の養成に向け、特に、群馬県、埼玉県の間境地域の医療情勢に重点を置いた教育に努めます。



群馬大学と埼玉医科大学の医学生が共同学習します

「はじめて学ぶ地域医療」では、地域医療の実際と医療行政について学び、医師不足地域の課題及びその解決方法について考えます。医学科生のほか、保健学科生、共同教育学部生、理工学部生、情報学部生も参加します。



「県境地域から学ぶ地域医療集中演習（利根川プログラム）」では、医師不足が深刻化している両県間境の医療情勢に精通する総合医の養成に向け、関連医療機関で実習に参加します。

ロゴマークデザインについて



本事業をイメージしたロゴを両大学の学生等から公募した結果、中嶋理名さん（群馬大学医学部医学科3年生）の作品が最優秀賞として選ばれました。今後、ホームページや教材等資料に幅広く活用していく予定です。



羽鳥 麗子 医学部附属病院 地域医療研究・教育センター講師

「新たな教育プログラムは、群馬大学の医学教育開発学講座、総合医療学講座と連携し、小児科、産婦人科、救急医療、感染症なども含めて、将来の地域医療で必要となる臨床能力を身につけるとともに、社会貢献する向上心や自分の習得した専門性を地域に還元したいという「地域医療マインド」の養成も目指します。」

教育を軸とした医療安全文化の醸成

(大学院医学系研究科)



医療における安全文化とは、医療に従事する全ての職員が患者の安全を最優先に考え、その実現を目指す態度や考え方およびそれを可能にする組織のあり方であると言われています。本学では、医学部附属病院において平成26年（2014年）に判明した腹腔鏡手術における医療事故の反省を踏まえ、安心安全な医療の提供に向けた改善・改革の三本の柱の一つとして医学系研究科に医療の質・安全学講座を設置しました。医学部附属病院における、より安全で質の高い医療の提供のためのスタッフ教育と共に、医学部医学科卒業前から医療安全教育の充実を図り、より良い医療安全文化の醸成とこれに根ざした人材育成を目指しています。

医学部医学科における6年間を通じた系統的な医療安全教育



医学部附属病院における医療安全教育



医療安全研修の充実

コミュニケーションやチームワークの研修として、全職員を対象にTeamSTEPS®研修を導入し、多部署・多職種で研修しています。



医療安全週間

世界患者安全の日9月17日を含む1週間を医療安全週間と定め、安全文化を市民・患者・職員で共有し学びを深めています。



実践的シミュレーション

人型シミュレータを用いた、病棟での臨場感のある急変シミュレーションを実施し、より安全な環境づくりに努めています。



田中 和美 大学院医学系研究科 医療の質・安全学 教授

「医療安全教育、そして医療の質と安全の向上に関する様々な取り組みを通し、より良い医療の提供に繋がるよう日々努力を重ねています。また、これらの取り組みを広く社会に発信することも本学の使命と感じています。」

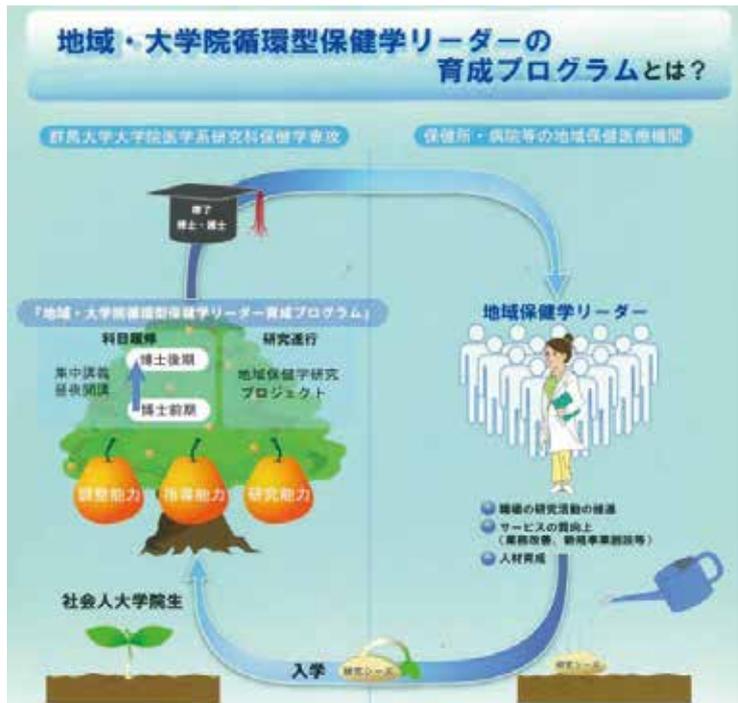


保健師人材育成への取り組み

(大学院保健学研究科)

群馬大学大学院保健学研究科では、群馬県や各自治体と連携し、保健師人材育成計画の策定支援や各種研修講師の派遣等、保健師人材育成の取り組みを行っています。また、自治体のニーズに即し、効果的な貢献が行えるよう長期的な活動を続けています。

1. 人材育成ガイドラインの作成と人材育成の推進



高崎市保健師が左図のプログラムを利用し、市独自の人材育成ガイドライン作成に取り組んだことをきっかけに、人材育成の研修講師や評価チームのスーパーパイザーとして継続的に関わり、自治体の人材育成をサポートしています。

平成19年度に地域活動と教育の一体化を目指し構築した「地域・大学院循環型保健学リーダーの育成プログラム」

2. 中堅保健師向け研修会の実施



群馬県主催の中堅保健師研修会の企画と講師を、約20年間担当し、県内保健師の専門能力の向上に寄与しています。

3. 地域課題解決につながる手引書作成



保健師が個別支援事例から地域課題解決の検討に活用されることを目的とした手引書作成の検討委員長を担当しました。(日本看護協会発行)



佐藤 由美 大学院保健学研究科 看護学 教授

「生活習慣病予防、介護予防、子育て支援、障がい者地域生活支援など、地域保健福祉の課題が多様化・複雑化し、保健師に求められる役割は拡大しています。今後も、社会のニーズに応える保健師の皆さんを応援していきます。」

多職種連携教育で保健医療人材育成に貢献する

〔 多職種連携教育研究研修センター
WHO 協力センター 〕



「現代の保健医療」は、高度化・複雑化そして細分化しています。また保健医療へのニーズも多様化しています。このような現代の保健医療を行うには、医師・看護師・検査技師・理学療法士・作業療法士・薬剤師などの複数の専門職の協力なしには成り立たしません。

「現代の保健医療」が有効に機能するには、優秀な専門職の個々の育成に加え、保健医療チーム全体の教育が必要となります。本センターは、我が国のみならず、アジア太平洋地区へチーム医療教育を提供し、高度化・細分化した現代の保健医療を实践できる保健医療専門職を育成することにより、世界の人々の健康に貢献します。



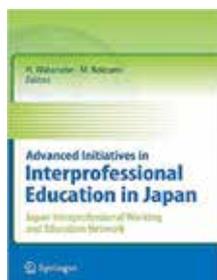
群馬大学WHO協力センターの主な取組

1. チーム医療教育の実践
2. WHO 関連書籍の翻訳事業



コロナ禍では、海外向けのチーム医療教育をオンラインで実施しました。令和3年（2021年）より新規事業として、翻訳事業を開始しました。

3. 多職種連携教育に関する研究
4. アジア・太平洋地区にネットワーク形成



チーム医療教育について効果検証をおこなっております。



アジア・太平洋地区にチーム医療教育を広めます。



篠崎 博光 多職種連携教育研究研修センター センター長

「WHO（世界保健機構）はチーム医療教育が世界における持続可能な保健医療の実現のためのカギであると期待しており、チーム医療教育の実践を推奨しています。」



社会人の活躍の場を広げるリカレント教育

(理工学部、情報学部)

理工学部では、平成 29 年 (2017 年) 度から社会人が工学の基礎を学び直し、新たな知識・技能を修得する「リカレント教育講座」を開講しています。これまで 約 120 社、約 620 人が受講しています。

群馬大学 GUNMA UNIVERSITY
EMERC エレクトロメカニクス教育研究センター

令和4年度 群馬大学理工学部教職員による
リカレント教育講座

お仕事での活躍の幅
ひろげてみませんか

お仕事
帰りに
講座は
18時～

5日間で
1講座
7/25(月)
開始

材料力学	プラスチック材料	金属材料	機械力学
熱力学	英語で学ぶ熱力学	流体力学	英語で学ぶ流体力学

デジタル関連講座新設 いろいろ選べる全15講座

確率統計	電子工作実習	プログラミング基礎演習	プログラミング応用演習 AI講座
3次元CAD超入門	デジタルものづくり	機械工作実習	



情報学部では、現実のさまざまな問題・課題の解決に必要なデータ解析の基礎能力を身に付ける「社会人のためのデータ解析」を開講しています。



荒木 幹也 大学院理工学府知能機械創製部門 教授 (産学連携推進部門長)

「リカレント教育講座は、社会人のための学び直しや新たな知識・技能の修得の機会として地元企業の皆さんに利用いただいています。今後も本学ができる地域貢献のための貴重な場の一つとして継続していきたいと考えています。」

群馬と世界をつなぐグローバル人材の養成と就職支援

(大学教育・学生支援機構)



GHKG プログラムを全て受講したグローバル人材の「61.4%」が群馬県企業へ就職

「グローバル・ハタラクラスぐんま (GHKG)」プロジェクト

- ・群馬県の社会・経済・文化等の持続可能性を高めることに貢献できる人材
 - ・群馬県を拠点に、グローバル地域創生の担い手として企画力・実践力を備える人材
 - ・多文化共生社会ダイバーシティ社会でコミュニケーション力・リーダーシップ力を備える人材
- これらを備えた「グローバル人材」を養成し、県内就職を支援しています。

「グローバル・リーダーシップ・プログラム」(文部科学省認定)

- ①キャリア教育 (30 時間)
「グローバル地域創生と企業」等
- ②コミュニケーション教育 (30 時間)
「ビジネス日本語」「異文化コミュニケーション論」
- ③中長期インターンシップ
2 週間×2 社あるいは 4 週間×1 社



授業風景

「グローバル人材」を群馬県へ定着させる取組

- ①地域と企業と外国人留学生との接点を増やす。
- ②質の高いインターンシップを実施する。
 - ・課題解決型：自治体の課題を調査し解決策を提案
 - ・ビジネスモデル型：若者や外国人の視点を生かしてビジネスモデルを構築
 - ・業務遂行型：企業で業務を体験

5 年間で 132 社、のべ 142 人の外国人留学生・日本人学生が参加
- ③外国人学生と日本人学生の協働活動を高め深める。



ジェトロ群馬インターンシップ



自動車業界研究インターンシップ



結城 恵 キャリアサポート室室長、大学教育・学生支援機構 教授

「群馬から世界へ！世界から群馬へ！国際的視野を持ち、多様性に対応するコミュニケーション力と共創力の高い各分野の専門職業人を、産学官金協働で養成し、群馬の産業と社会の活性化に貢献したいと願っています。」



国際社会で活躍できるリーダーの養成 ～グローバルフロンティアリーダー（GFL）育成プログラム～

群馬大学は、国内外において主体的に活動できるグローバル人材の育成に力を入れており、その特徴的なものとして国際社会で活躍できる独創的なトップリーダーを育成する「グローバルフロンティアリーダー（GFL）育成プログラム」を全学展開しています。



このプログラムは、英語コミュニケーション力、幅広い教養、国際的視野を育むとともに、早期に専門的な知識・技術等を習得させることを目的としています。また海外への短期留学や研修、国際ボランティアなどへの参加を推奨しています。

グローバル交流セミナー・サマーセミナー

GFL1～2年生の
合宿研修

(2022年度は荒牧キャンパスで実施)



短期留学

オーストラリア
短期留学プログラム



特別講演会

GFL1年生が
企画する特別講演会

(2022年度は山本県知事が講演)



国際的視点を持って自ら行動できる学生が育っています。
GFL生の約60%が留学・海外研修等に参加！



Pramila Neupane グローバルイニシアチブセンター 副センター長

「GFLプログラムでは、キャンパス内外の特別な活動を通じて、地域や世界の問題について知識や理解を深め、文化や社会について学び、外国語やコミュニケーション能力を伸ばすことができます。国際交流を楽しみ、他学部の学生と親交を深める機会もあります。」

先進的な教育を実践する附属学校園

(共同教育学部附属学校園)



群馬大学は、共同教育学部附属学校園として幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校を設置しています。

群馬県の教育モデルとして

附属学校園は、群馬県の教育モデル校としての役割を担い、群馬県教育委員会や共同教育学部と連携・協力し、今日的な課題解決に向けた授業や先進的な教育を行っています。また、その成果を県内外の教育関係者に公開しています。



ICTを授業や学校生活で活用

タブレット端末を活用して効果的な授業を実施しています。また、学校生活でも使用しています。この取組は、全国的にも注目されています。



充実した教育実習を実施

毎年、本学共同教育学部・大学院教育学研究科等から教育実習生を受け入れ、丁寧で熱心な指導を行っています。





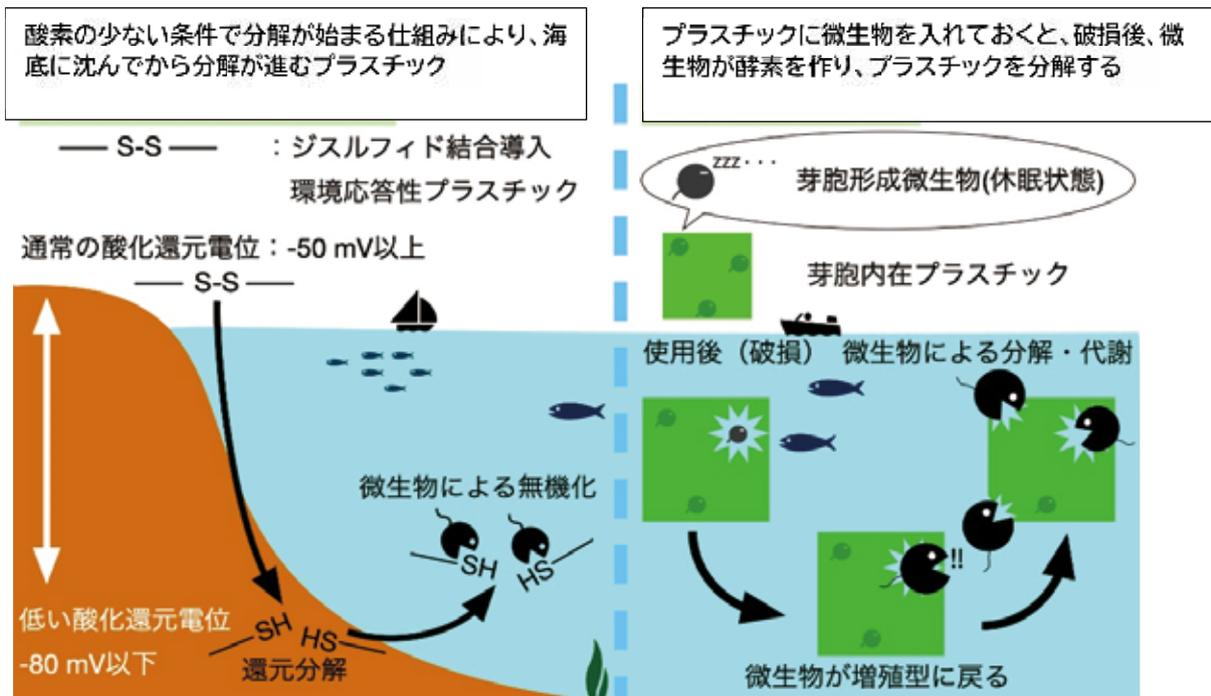
海を汚さないプラスチックの開発

(大学院理工学府)



現在、世界中の海でプラスチックごみによる海洋汚染が問題になっています。これによりプラスチックごみを魚が取り込み、その魚を食べた人間の健康にも影響を及ぼす可能性が指摘されています。群馬大学大学院理工学府粕谷健一教授のチームは、使用中は高い強度を持ち、海の中に入ると微生物によって完全分解される海洋生分解性プラスチックの開発に取り組んでいます。

分解開始時期を制御するための仕組み



粕谷 健一 大学院理工学府分子科学部門 教授

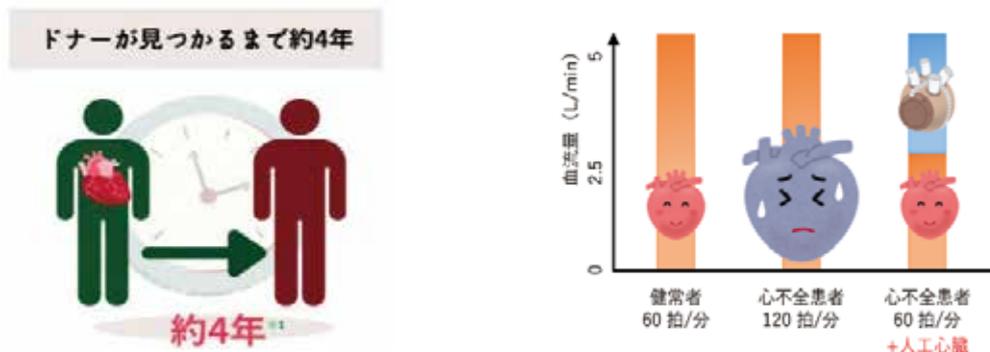
「現在、内閣府・NEDOが推進するムーンショットプロジェクトとして、海洋生分解性プラスチックの開発に取り組んでいます。プラスチックゴミの無いクリーンアースな未来の到来を信じて、新規材料創出を目指します。」

心臓移植を待つ子どものための体内埋込型人工心臓の開発

(大学院理工学府)



心不全など、薬での治療が難しい重度の循環器の患者さんの命を救うためには「心臓移植」が最も有効とされています。心臓移植が必要な患者さんは、ドナーが見つかり移植ができるまで、平均4年かかります。この間、「人工心臓」が必要です。



しかし、世界で使用されている小児用の人工心臓は、大型で体内に埋め込めないため、患者さんはベッドで寝たきりです。心臓移植を待つ子ども達をベッドから解放するため、群馬大学大学院理工学府 栗田伸幸准教授のチームは、超小型磁気浮上モータを用いた長期間使用できる耐久性に優れた小児用体内埋込型人工心臓の開発に取り組んでいます。



栗田 伸幸 大学院理工学府電子情報部門 准教授

「心臓移植を受けたくても受けられない小児重症心不全の患者さんが、ドナーを待つ時間も安心して過ごせるよう小児用体内埋込型人工心臓を実現したいと思っています。」



糖尿病の根絶を目指す新たな治療法の開発

(生体調節研究所)

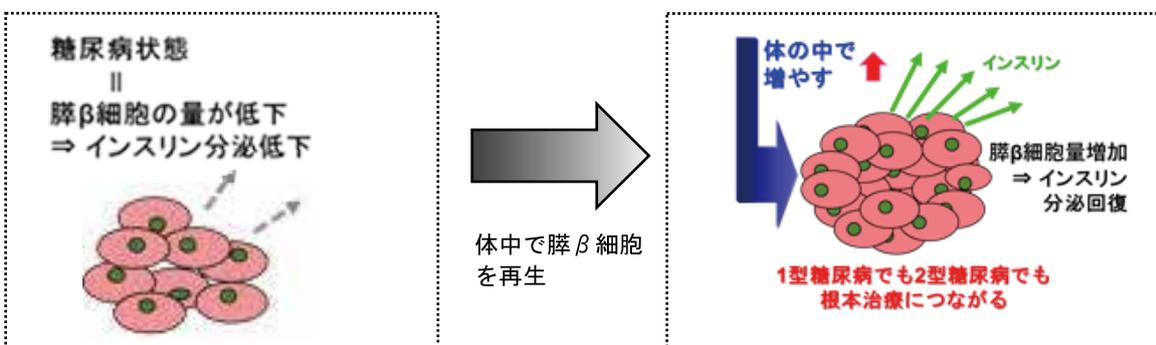
糖尿病は日本人の4人に1人がかかっている可能性のある国民病です。1型糖尿病は、膵臓においてインスリン（血糖値を下げるホルモン）を分泌する膵β細胞が含まれる「膵島（すいとう）」が破壊されてしまう病気です。また、加齢や過食、運動不足などが原因でおこる2型糖尿病においても、膵β細胞の量が減っていることがわかっています。



現在の糖尿病の治療法は、食事、運動、インスリンの注射や薬で血糖値を下げるといったものです。しかし、糖尿病そのものを治す治療法ではなく、治療を止めてしまうと再び悪化します。

糖尿病の根本治療法の開発

群馬大学生体調節研究所 白川教授のグループは、日本でヒト膵島を研究に使用することが困難であった状況を打開し、正式な倫理審査で承認を得たヒト膵島やiPS細胞等を用いて、糖尿病を治す新しい治療法の開発を進めています。



白川 純 生体調節研究所 代謝疾患医科学分野 教授

「身近な病気である糖尿病は、食事や運動など私たちの生活にも大きく関わっています。いつも、多くの糖尿病患者さんやご家族から元気をもらって診療や研究に取り組んでいます。」

自動運転、スローモビリティで社会の課題を解決

(次世代モビリティ社会実装研究センター)



群馬大学は、次世代の移動手段として、主に自動運転とスローモビリティ*を研究開発しています。我々は地域の課題となっている運転手不足、過疎地や高齢者の交通手段などを解決するため、この技術を用いて地方公共団体等と積極的に連携協力しています。

(*モビリティ：職業の移動や階層の移動、または乗り物など人の移動に関する用語。)

群馬県・前橋市と連携協力 「デジタル田園都市国家構想」



群馬大学は、前橋市が進めるデジタル田園都市国家構想の一つとして、中央前橋駅から前橋駅の間を、ローカル 5G を活用した遠隔監視システムでバスの自動運転の実証実験を行っています。

桐生市と連携協力 「ゆっくりリズムのまち桐生」



群馬大学が研究開発しているスローモビリティ、ナローモビリティ等を桐生市内の遊休施設や公道に試行導入し、地域の課題解決に取り組んでいます。

本格的な導入に向け桐生市と連携協力しています。



太田 直哉 次世代モビリティ社会実装研究センター センター長

「本センターの活動は、単に自動運転やスローモビリティの技術や車両を研究・開発するだけでなく、それらを用いたシステムを社会で実践することも大きな使命としています。これからも多くの企業や行政の方々等と交流、協力いただきながら、目的の実現を目指してまいります。」



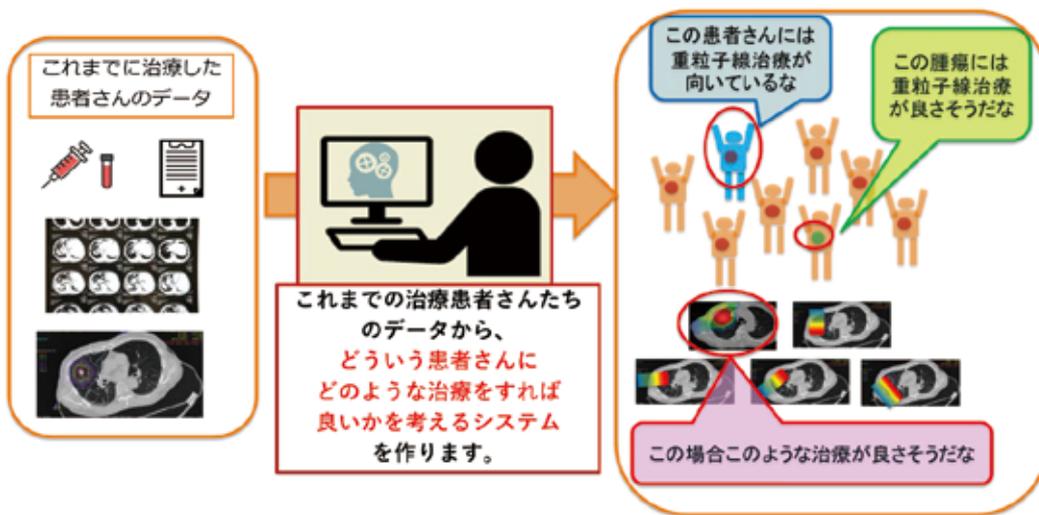
重粒子線による最先端がん治療の研究開発

(重粒子線医学推進機構)

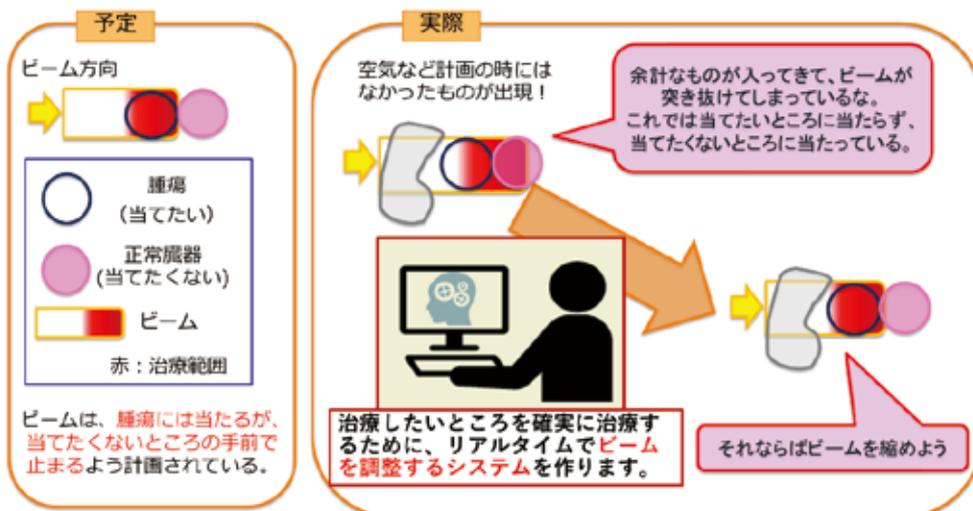
重粒子線治療は、治療が効きにくい、または持病や治療による副作用の心配があり治療しづらいといった患者さんのがんを治す最先端の治療法の1つです。群馬大学ではこれまで5,844人（2022年8月現在）を治療してきました。

我々は、多くの実績と先進技術を生かし、重粒子線治療をより安全、正確、効果的に行う研究を行っていきます。

《人工知能（AI）を活用して最適な重粒子線がん治療を提供する研究》



《ターゲットを確実に狙うアダプティブ重粒子線照射技術の開発》



大野 達也 重粒子線医学推進機構 重粒子線医学研究センター長

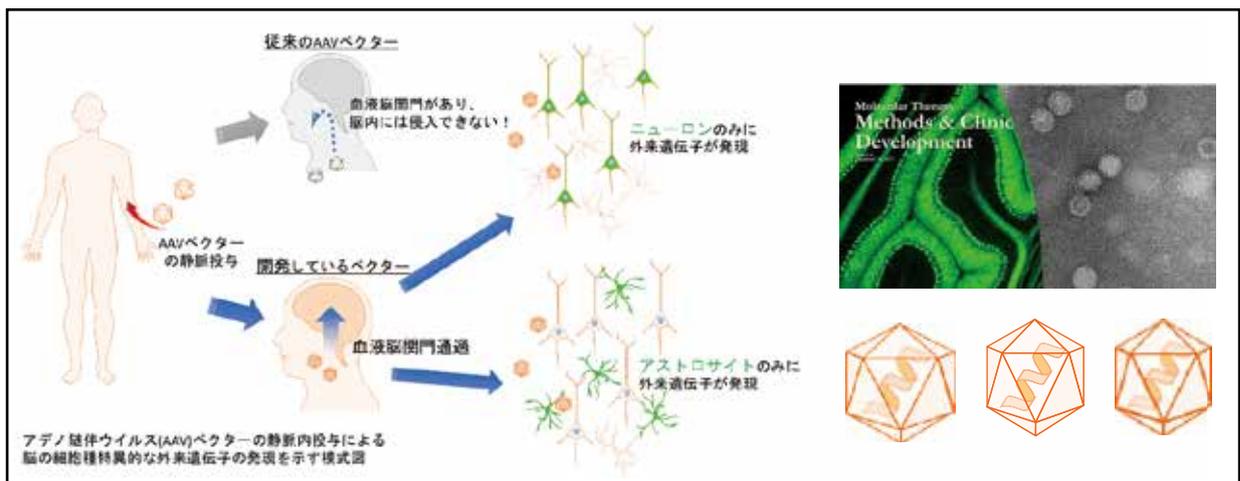
「群馬大学は、国内初となる大学病院設置型の重粒子線治療装置を有します。日本が先導してきた重粒子線がん治療技術をさらに発展・進化させて、群馬大学から地域の皆様のみならず世界に向けた社会貢献を目指します。」

ウイルスベクターで脳の難病治療法開発に挑む

(ウイルスベクター開発研究センター)



「ウイルスベクター」とは、ウイルスから毒性部分を取り除き、空いたスペースに遺伝物質を載せて細胞に届けるために使う「運び屋」です。平井研究室では、ウイルスの中でも最小クラスで病原性もないアデノ随伴ウイルス（AAV）ベクターを使用しています。これを使って治療用遺伝子を細胞内へ運び、先天的な遺伝子異常を修正したり、老化した細胞を若返らせたりする研究に取り組んでいます。



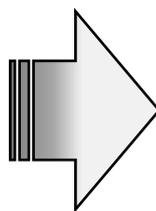
群馬大学が開発した AAV ベクターは、国内外の脳科学の研究者に活用され（平成 30 年（2018 年）以降、世界の 40 以上の研究機関で合計 539 件）、脳に関する基礎研究や、脳の疾患をはじめとする様々な病気の遺伝子治療の開発研究に貢献しています。

現在

難病の脊髄性筋萎縮症の赤ちゃんが AAV ベクターの注射 1 本で歩けるまで回復。ただし出生直後の治療が必須。



Science 2018



未来

アルツハイマー病やパーキンソン病の治療へ応用。



平井 宏和 未来先端研究機構ウイルスベクター開発研究センター長
 (医学系研究科 脳神経再生医学講座教授)
 「これまでの医学では手も足も出なかった難病の治療が、新しいウイルスベクターを開発することで可能になると確信し、研究に取り組んでいます。」



地域医療の拠点「群馬大学医学部附属病院」

(医学部附属病院)

群馬大学医学部附属病院は北関東有数の拠点病院です。群馬県の皆さんが安全で健康な生活がおくれるよう、大学病院の役割である先進的な医療の実践・開発・教育を推進しています。また、地域の拠点病院として、群馬県や県内医療機関等と連携して円滑な医療支援・医療活動を行っています。

【令和3年(2021年)度実績】

・入院患者数：19.9万人(1日544人)、・外来患者数：43.9万人(1日1,816人)

新型コロナワクチン集団接種に協力



山本知事から感謝状の授与を受ける齋藤病院長

群馬県が実施した新型コロナワクチン集団接種に群馬大学の医師、看護師、臨床検査技師、薬剤師等が協力しました。令和4年(2022年)3月までに県央ワクチン接種センター(Gメッセ群馬)へ延べ人数で医師2,184名、看護師6,233名、薬剤師1,671名を派遣しました。

大規模災害で被災者を救済

群馬大学は草津本白根山噴火、新潟県中越地震、東日本大震災、台風19号長野県水害などの大規模災害時、D-MATを編成し被災者の救済活動を行っています。

【D-MAT (Disaster Medical Assistance Team)】

医師、看護師、薬剤師、事務職員からなる災害派遣医療チーム



群馬県ドクターヘリと連携した被災者の救助活動



被災地の病院での経時記録の様子



齋藤 繁 理事(病院担当)

「医療安全を最優先とする文化と風土の醸成に継続的に取り組み、受診される患者さんやご家族の方へ良質かつ快適な療養環境を提供できるよう、職員教育の充実と施設・設備の整備に鋭意努めております。」

オーダーメイドの治療を可能とするがんゲノム医療

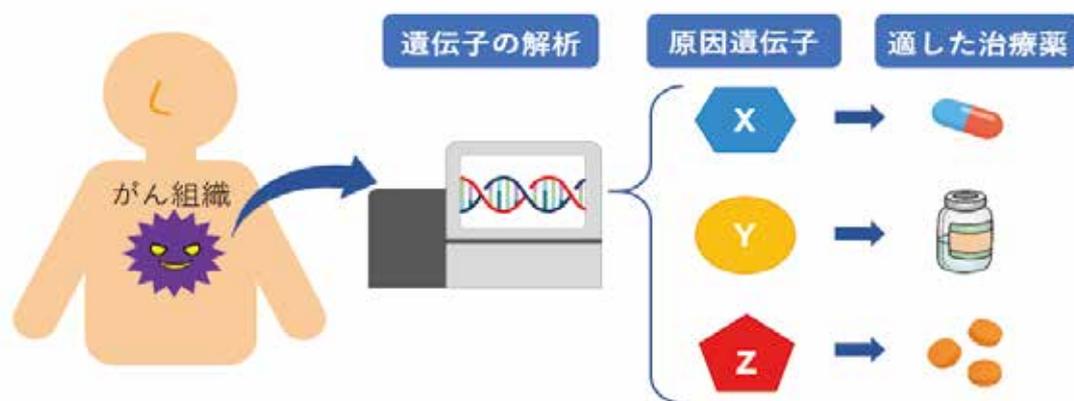
(医学部附属病院)



日本において「がん」は死亡原因の約3割を占めています。医学部附属病院では「がん」に対して医療の充実、予防の啓発活動、地域医療との連携に力を入れています。また、令和3年（2021年）6月から「がんゲノム外来」を開設し、本格的にがんゲノム医療を始めました。

がんゲノム医療とは、患者さんのがん組織の遺伝子を解析して原因遺伝子を特定し、一人ひとりに合った治療薬を見つけます。同じ部位のがんでも、原因遺伝子が違うと適した薬は異なります。

我々は、患者さんやご家族に、より良い療養環境を提供できるよう努めてまいります。



※国立がん研究センター資料をもとに作成



塚本 憲史 医学部附属病院 腫瘍センター センター長

「がんゲノム医療は、がんの原因となった遺伝子の異常を調べ、それに合った治療薬を見つけるものです。治療法が無くなったがん患者さんに、新たな治療法を見つける手段として期待されています。」



群馬ちびっこ大学

(地域連携推進室)

群馬大学では、将来を担う小・中学生を対象に、体験的学習を通じて学問の面白さ奥深さを肌で感じてもらうことを目的として「群馬ちびっこ大学」を開催しています。この事業は、平成17年度(2005年度)から毎年8月上旬に開催し、毎回約6,000人が参加する大きなイベントとなっています。コロナ禍においてはオンラインで開催していますが、令和元年度(2019年度)までに総数93,475人が来場しています。夏休みの自由研究にも活用されています。



色で分かる検査の世界



さらさら、ぷるぷる不思議な物質



紙スイレンをつくって実験



検流計(けんりゅうけい)の針が動きます。

磁石と電気のナゾ



花屋 実 理事(研究・企画担当)、副学長、地域連携推進室長

「将来の科学技術立国を担う若い芽を育み、きらきら光る子供たちの目がサイエンスの発展につながることを願って、群馬大学では地域貢献事業のひとつとして群馬ちびっこ大学を実施しています。」

ダイバーシティ&インクルージョンの推進

(ダイバーシティ推進センター)



ダイバーシティとはジェンダー、障がい、国籍、性的指向・性自認、宗教、年齢価値観など多様多様な者がいる状態で その者達を受け入れ、互いの経験や能力、考え方などを尊重し生かしていくインクルージョンを推進することで、社会を成長へと結びつけることができると言われています。

群馬大学では、ダイバーシティ&インクルージョンを推進するため、平成25年(2013年)に男女共同参画推進室を設置し、さらに令和2年(2020年)にダイバーシティ推進センターへと発展させてきました。また、授乳、書籍やDVDの貸出、交流会・ミニレクチャー、両立支援アドバイザーによる相談などを行う「まゆだま広場」を各キャンパスに設置し、教職員の両立を支援しています。



荒牧キャンパス
まゆだま広場



昭和キャンパス
まゆだま広場



桐生キャンパス
まゆだま広場

<研究者への支援>

研究者がライフイベントと研究と両立できるよう研究支援者を配置する制度、女性研究者が研究リーダーとなるための研究助成、意識啓発を兼ねた各種イベント、両立相談などの複合的な支援の継続により、男女共同参画推進室設置当時に14.5%だった女性研究者が少しずつ増加しています。



小和瀬 桂子 ダイバーシティ推進センター長

「ダイバーシティ推進センターは、すべての人がお互いを尊重し、活躍できる環境を整備し、学びやすい、働きやすい大学となるようサポートします。」



ウクライナの学生・研究者の受け入れ

(ウクライナ教育研究支援対策室)

令和4年（2022年）2月24日、ロシアによるウクライナに対する武力侵攻が始まりました。群馬大学では世界が平和を取り戻し、無辜の民が傷つかない日が一刻も早く訪れるよう学長メッセージを発信しました。さらに、ウクライナ教育研究支援対策室を設置し、ウクライナから避難した学生及び研究者の受け入れを開始しました。2月1日現在、学生4人、研究者1人の計5人が本学に在籍しています。

なお、この活動は、ウクライナ大使館、群馬県、前橋市と連携協力し、日本財団や一般の皆様から援助をいただいています。



ウクライナ駐日大使の講演

ウクライナのセルギー・コルスンスキー駐日大使は、令和4年（2022年）6月、群馬大学で講演を行い「将来を担う学生の受け入れは最も大切だ。2国間の協力の発展に力を尽くして欲しい」と語りました。



ウクライナ学生等による高校訪問

ウクライナの学生達は、県内の高校を訪れウクライナの歴史や文化とともに母国の惨状や平和に対する思いを紹介しました。生徒達からは「情報を見極めて何ができるか考えたい」「世界で困っている人の力になりたい」等の感想が寄せられました。



飯島睦美 ウクライナ教育研究支援対策室室長、大学教育・学生支援機構教授
「戦後生まれが8割を超した日本ですが、平和の尊さ、戦争の醜さへの思いは確実に受け継がれていると、頂く支援を通して感じます。群馬県内外の皆さまからの温かい支援を受けながら、ここ群馬大学で過ごす日々は、彼女たちがウクライナ帰国後、その復興に携わるときの力強い支えになってくれると信じています。」

海外の大学との連携により
世界をひきつけ、地域をグローバルに展開する拠点を目標して
(グローバルイニシアチブセンター)



オンライングローバルキャンパス (Smart Campus-to-Campus: SCC)



教育の国際化

- ・ オンラインも活用した世界の大学の授業履修、国際共同学位プログラム(ダブルディグリー)の開設
- ・ 世界の大学生とクラスシェア

研究の国際化

- ・ オンラインを活用した国際共同研究コミュニティの形成

地域の国際化

- ・ 多様なプレイヤーと協働・共創できるコネクティッドキャンパスの構築
- ・ 産官学国際インターンシップの開発・提供



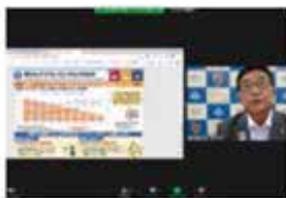
ベトナムFPT大学 (FPTコーポレーション) のFUNIX (オンラインプラットフォーム) を基盤として、SCC重点校の教育・研究のリソースを共有。

群馬大学で養成するべきグローバル人材の育成と大学・地域の国際化推進を図ります。



富岡市との地域連携事業

街なかの空き家を「エコリノベーション」して、若者や外国人留学生が「起業(活動)」できる“One Day Shop”を開設。群大生×外国人留学生が、工学と経済の両面で、「外国人に選ばれる街づくり」を考え、地域の未来をデザインしています。



桐生市との地域連携事業

群馬大学国際センター×桐生市×ベトナムIT企業FPTコーポレーションが連携して、多文化共創オンラインプラットフォームを構築。桐生市に住む外国人が抱える課題のAI自動応答システムによる回答多言語による桐生市のデジタルプロモーションなどを設計しています。

地域の日本語学習・支援を実施する拠点形成

近隣の教育機関等との連携を深めて、地域の日本語学習・支援を実施する拠点形成をめざしています。

外国人留学生のキャリア教育としての日本語教育と留学生の就業力育成にも力をいれています。

地域にも開けたGlobal Café

国際社会で活躍するゲストを交えて、国際社会で起こっている現状や日本の役割についてディスカッション。



飯島 睦美 グローバルイニシアチブセンター センター長

「国内・海外の機関と連携して、多様性を理解し、地域社会・国際社会の課題解決に貢献できるグローバル社会の構築を担える人材育成に取り組んでいきます」



群馬大学が古墳大国群馬を発掘

(共同教育学部)

群馬県の古墳調査は、東京大学から尾崎喜左雄氏を群馬県に招聘したことから本格的に始まりました。尾崎氏は、昭和45年（1970年）3月まで群馬大学に在籍し、群馬県古墳研究の礎を築きました。その功績から「群馬県の古墳発掘の父」と呼ばれています。



尾崎喜左雄 群馬大学名誉教授
(1904年～1978年)



芝根村1号古墳発掘調査風景

群馬大学が発掘した古墳は、昭和23年（1948年）の前橋市粕川町の鏡手塚古墳にはじまり、太田市鳥山上町の鶴山古墳、東吾妻町三島の四戸古墳群、佐波郡玉村町の芝根古墳群、前橋市広瀬町の前橋天神山古墳など300基を超えています。

群馬大学が発掘した文化財

群馬大学の調査資料は「考古遺物・記録・写真」の3点が揃った全国でも類を見ない貴重なものです。また、発掘した文化財は東京国立博物館、群馬県立歴史博物館（寄託）、群馬大学共同教育学部に所蔵されています。

国指定重要文化財 三角縁五神四獣鏡



群馬県前橋市の前橋天神山古墳から出土した鏡で古墳時代前期、4世紀ころの築造。関東地方の前期古墳副葬品の全貌を知ることができる極めて重要な資料。

写真：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

挂甲武人埴輪



群馬県榛東村新井の高塚古墳から出土した埴輪。6世紀中頃に近い前半、太田市飯塚出土の国宝・武人埴輪より前の作品。

写真：群馬県立歴史博物館提供